

勘違い

よっしー希少種

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネプテューヌMk2十周年らしいので、ネプギアメインのお話を

目次

勘違い

1

勘違い

ネプギアには不安な事があった。それは数日前のこと……。

「お姉ちゃん、この後暇？　暇なら一緒にゲームやらない？」

ネプテューヌをゲームに誘った時のことだった。恐らくネプテューヌなら仕事が残っているようなゲームをする事を優先するだろう。ネプギアもそうだと思っていた。いや、そう思っていてはいけないのだが。

「ごめんねネプギア。私ちよつと仕事があつてき……」

「え……？」

しかし、帰ってきた答えは全く予想していなかったものだった。ネプテューヌの口から「仕事」という単語が出るなんて思ってもいなかったのだ。

「お、お姉ちゃん……？　お姉ちゃんが自分から仕事やるなんて……熱でもあるの？」

それともまさか……偽物!？」

「ねぶっ!?　私が自分から仕事することがそんなにおかしいの!？」

「ネプギアの言い分もわかるわ。いつも仕事サボってるからね」

いつから居たのか、部屋の入り口に立っていたアイエフが話した。

「あいちゃんまで!? みんな酷いよお……」

「日頃の行いのせいよ。さ、仕事やるんでしょ? 手伝うから、さっさと片付けるわよ」

「はい」

「お仕事なら私も手伝うよ?」

部屋を出ていこうとするネプテューヌに向かって声をかけた。するとネプテューヌは勢いよく振り返るとネプギアの肩を強く掴んだ。

「ネプギアは今日は休んでいいよ」

「え? どうして?」

「ど、どうしても何も!」

「う、うーん?」

異様に慌てた様子のネプテューヌ。何かを隠しているようにしか見えない。

「いつもネプギアに仕事させてるから、たまには自分でやりたいんだって」

ネプテューヌの背後からアイエフが言った。

「……! そ、そう!! たまにはお姉ちゃんらしいことしようと思つてね!!」

「そ、そういうことなら……」

「そう! だから今日は後ゆっくり過ぎしなよ! ね!」

「う、うん。わかった。そうする……」

そうは言われたが、なんだか落ち着いて過ごすことが出来なかった。気分転換にゲームをしたが、どうもモヤモヤしたまま。何か隠してるんじゃないか、それかもしかしてネプテューヌの死期が近いから最後に仕事をしてるんじゃないか……等悪い事ばかり考えてしまう。

(……心配しすぎかな？ お姉ちゃんの事だし、きつと明日にはまたいつも通りに戻ってるよね)

そう、自分に言い聞かせた。

*

次の日も

「お姉ちゃん、どこかいくの？」

「ん？ ちよつとクエストにね」

「私も一緒に行ってもいいかな？」

「それは……ごめんね。あ、そうだ、書類の仕事まだ残ってるから、それやっててくれる？」

「あ……うん……」

その次の日も

「コンパさん、お姉ちゃん知らない？」

「ねぶねぶなら仕事部屋に籠ってますよ〜」

「え、そうなんですか!? 私も手伝わなきゃ……」

「わー! ダメです! ぎあちゃんはいれないでって言われてるんです!」

「え……なんですか……?」

「理由はわかんないです。ただ入れないでって言われただけですから……」

「……」

ネプテューヌの様子は戻らなかった。その上、わかりやすいくらいネプギアを避けているようにも感じた。それが余計にネプギアの不安感を増幅させ、心を傷付けた。

*

「私……お姉ちゃんに嫌われるようなことしたかな……」

「……した覚えは?」

「ない……」

「じゃあしてないんじゃない?」

耐えられなくなったネプギアはユニの元を訪れていた。

「でも急に私を避けるようになったんだよ……?」

「それは……ネプテューヌさんの方に何かあったの……かも?」

相当傷付いているのか、ネプギアはさつきからずっと机に突っ伏して泣いている。ユ

ニはこれ以上ネプギアを傷付けないように慎重に言葉を選びながら話した。

「……お姉ちゃん死んじゃうのかな？」

「そういう事じゃないわ！ ネプテユーンさんが死ぬとか100%無いから!!」

「じゃあ……なんで……」

「うーんと……えーと……」

ユニは言葉を探しながら視線をめぐらせた。その時、ユニの携帯の通知が鳴った。画面にはとある人物から届いたメッセージが映し出されていた。

(そうか、なるほどね……)

「と、とりあえず、一旦教会に帰った方がいいんじゃない？」

「どうして……?」

「えーっと、みんな心配してるかもしれないでしょ？ 大丈夫、私もついていくから」

「わかった……」

こうして二人はプラネテユーンへと向かった。

*

「ほら、入るわよ」

「……」

「大丈夫よ、私も居るから。ね？」

「うん、ありがとう」

二人は教会の中に入った。深夜でもないのに、やたらと静かだ。

「どうしたんだろ……」

「わからないわ。とりあえず、部屋に行ってみたら？ ネプテューヌさん居るかもしれないし」

「そ、そうだね……」

二人は教会の中を歩き、ネプギア達の部屋の前に着いた。

ユニが目で扉を開けるように伝える。ネプギアはゆつくりと扉を開けた。次の瞬間

……

パンパンツ！

と、クラツカーの音が響いた。

「ネプギア、お誕生日おめでとう！」

ネプテューヌが明るい声で言った。ネプギアは頭の整理が追いつかず、キョトンとしている。

「いやあ、この日まで隠し通すの大変だったよ。ずーっとネプギアにバレないように準備してたんだ」

（結構危ないところもあったけどね）

(無理やりなところもあったです)

「さ、本日の主役も来たことだし、パーティー始めようよ。ね、ネプギア？」

「……」

「ネプギア？」

「お姉……ちゃん……」

ネプギアはネプテューヌに抱きついた。

「ネプっ!? どうしたのネプギア!？」

「お姉ちゃん……良かったあ……」

「え? え?」

「えーつと、実はかくかくしかじか……」

ユニはネプテューヌにネプギアが何を話したかを伝えた。

「あちやあ……ちよつと露骨過ぎたかな。ごめんねネプギア、辛かったよね」

「だから言ったです。ねぷねぷはサプライズの為にぎあちゃんを避けすぎだつて」

「買い出しとかなら私達でもしたのに、全部自分でやるんだから」

「最愛の妹の誕生日だもん、私が準備したくつてさ。でもそれでネプギアを傷付けてたなら、やり方間違つてたんだろうね……」

ネプテューヌはネプギアの頭を優しく撫でた。

「お姉ちゃん……。ううん、嬉しいよ。私の為に、こんなに色々用意してくれて、ありがとうー！」

「いいんだよ！ だって私、ネプギアのお姉ちゃんだからね」

「うん！」

「よし、それじゃそろそろパーティー始めるよ！ みんな席について。ユニちゃんも」

「わ、私も!?!」

「せっかく来たんだから、参加していきなよ！ ノワールには私から伝えておくからさ」

「じゃあ……。お言葉に甘えて」

ネプテューヌ、アイエフ、コンパ、ユニ、そしてネプギアはテーブルを囲むようにして座った。

「よし、それじゃあ改めて……」

「「「お誕生日おめでとう、ネプギア」」」

「ありがとう……。みんな！」